KODAK Color Control Patches ©The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

服部文庫
1 17
2275

处方の记

117特
2275

宮城県図書館蔵

十三日 朔き二人あかいさ一人ぐして都の花たづねうん
とて午の時ばかり立ち出て車もてまづ隅田堤のあたりみ
とこころさしてゆきすぎくもりたれどちりしいぶせくい
たづぬるいうういてふねいあくくふすしおとる
くあるを橋といふを渡る岸おい馬くるまあまたいきちつど
きて人々きわひのゝしる川おい舟あまたうかべて大き
なるふきおのゝゝゆきゝしうるわどよ烟くゆゝし
筒とゝろうして下りくる舟あり人あまたのりこゞれた
りあれ何の料ぞととゝいあれいさあらとて人をのせ
つゝ氏川をのぼりくだるの川墓流ありとぞいふこの答

ることをなんぶ、三十かどあり、一ゑ、ふるそいあり
れ、このあゐいさをゞめら、一ゑ、いと出でゑ、ほけ
ふるくるゞつひよえすだ、あ、ゆく、ゆ、ちせる
なあいとをう、のくわくをゞ隅田川を九ゑて厩
橋、五葉橋、ちどりゑ橋ども、て、地ゞといふをとうて、
向島よつきぬやうく堤をつたひゆけば、ゑいやく
ゑ咲こだれて人いよく多くちりぬ三囲の社のあゑ
てるふ川のあれさ打ふれば、場合ちど云ふ
里のおどもつと打ちびてらゐひでのるゐいつく
ば山をふうられるふゑ、いとなもしろし、

すこ、さうゐすぎたれと風ちをゑひまちく花のち
りまちるちく、ゑ、をうし酔ひしれたる人のゑのもと
ふうたひまふもあり人もちげゑくひめぐりてとゞめ
られて興さますもあり、ひたひみ手をあて、ひさすゑ
ちゞむるもあり、ゆく、杯の酒のこあうくもあり、ゑを
ばえて、せでゆきうふ人の姿うちを、ゑ定めするもあり
ちどさまく、れいなのづうふゐもうれ、をてさをの
ら世のおのやうふちんなほゆるいふゑのてきをゑふ
いそずやいつばあれいさあらうぶ
ちとそれ、都のうちれと花咲くうゐいと

せうそうのあれいさいかうといふものよくしぬ人あれいうることをよきえたりとていろいろこづるめり。あき人多くあつまりくさぐさの物どもあきなふ。所にてつくりたるてのごひのうちもの人のおもて胡蝶の羽きさかふつれぎつたるちとところよつてをりをつりくるるいものゑの煮たる魚のゑのゆでたるばんとりふ菓子どこかしこふちぐたりたるそうい。これらをさのむ人もあるぬづし紙のうへいたるそたいをいつしそとおもれいあるいさとろびてまいたるぶいるうい

ちる花をたもとみうみてしのふ紙をとりまるものゑあるねいこのうゑも腰れたれどそをしむきろいやさしくやけどもく堤いきて黒い咲きつづくもてまでかけのんまいはるぎぬへしとあるいさいつい白髪のあるうちうるこそびひもちあたうべきもどもしやすぬこのやすくるふの保いとろめいぶちとて人いたづら出で入りてまぎいへりぶでもせんさくふもちるをとあつらふれいが仏あえるさる入れてもてきぬこれいが小きたるさくるゑありそのうい

春風ふんひらきてみやこよりいきをとひのほを
のつちうふそれよそへて宝のたねとしるせるふくろあ
りあけてみれば男と女と二人ならびたるが都の方へ
ちかえなまりたるされいりせ物語のむかしをおもひ出
て独せるなありべちにまいすの寺につけたる小き紙あ
りうへに晋のけをうつきて下に吉としるして右りのる
まどふをうつきてたのうちにちんをぞしるしたるそのう
た

あしよりうちくる汐のいやましに君がんを
おもひますかなしき白にならひてうつゝるものうへ

出してだまれをうらんとする市ありうみたるまさくの寺
二の句ひらけてとあふりやとあおいささてらくをりてて作
屋のあたり打渡りてふねよりうれば堺の舟の方のそこ
ふうつりてちりまちにさまえていきれぞうしよくあの
めまありしけど舟の中ば尤なふとなう物おそろしそてた
ばおそぞすこし三る斗なる舟より下りて待乳山にのぼり
てちるうにあうさを寺もる千里寺ることのやうに見
えそりとのとりしがとつて浅草の公園につきぬ観世音
の内陣に参りてふしおうむりをたふとし御堂を下りて
あくうしこさまよそびありく鳩あるはむれゐて豆などあさ

るが手もとゝ（つづ）うゐるみ幼きが匠ひまいせど、
えとゝへ侍ちいちげたるいとをゝし西ゝのうゝまれて
ハ大きなる地のおろろまぬ島の中まあづまやちど建
てゝくゝくの魚どもきいちどうちこあそぶさまい
とをゝし笑ルさきたれどおほゝしい青柴まそなるみた
るれぬ高ゝふずゝこつうれたうもてあそびまれも
とめてあゝたれハ幼きいいたういさましうちぬ雷
門をもて鉄を馬車のうて上野へとゝろさん人のふ
どゝゝれあゝざまるもちるやうあう車のひゝきいとお
とゝくゝしやゞて上野のふもとふつきぬ石のきだもし

おのゝうて武蔵隊のおくつきのもとうちるゞもれハ
あうる赤ゝの塔どもがすふさくやうふらゐふい
おほくさうすゞまたれどあふさうちるものうて、
うくくミどゝろおほゝこの島の上をちどのふうおけ
るやうみいたうちうけりあふいさ手をくゝかゝらを
かゝむけていきつていひ出せるうふ
時うて死の木みるふる重ルあれいに風るきゆる
へふうちうゝかゝこを撃ルすゝいうゞあゝん柴ざふよ
ちうみたるとゝろのさまゝ又奇のくゝをうゝれハ
必ゝルづうちひていふまいあゝびあわゆゞて東照宮の

ゆき　おろうそ　むみ　このあたりのそこもいとさわさきそろ
ひたろ　あみの玉垣し　しろうづもれて　おまへの　柳も　お
のづから　白ゆふをぞかけたる　こそ　ろ　花の石のきだも
しとりて　のぞみ　ゆのをろうみ　いそぬ　こも　板あま
た　咲　をびたろ　ゆふそひて　三橋のもとみいそぐ　ふ　の
たれ　ちぐ　むれば　青葉のひまろ　花のしろうこゆるが　一
きい　虚　きろうして　いとをうし　ほしくれずくみろぬ　あないさ　ちごりをそて
咲花をれのさろみ　ゆろせ　ろ　るそてぐきう
しろめたそて　四の白うこるもてぐしとあぐがそれよ
り　車　そて　ふよう　るちろ　まぐふ　ろの　今しも　ふうろへ

ふろうそる　やうみ　おぼゆる　しぐみの花　花の　ゆりろ
うしすきこそ　ろぬづき　まこと　やうづうぐよき　仏
でる　ぐ　ぐい　あまろいまろ　てれど　かうやうの　花そ　人
みうすつきものも　あぐ　ねば　しるさん　しやくそる　べ
しとれうくれとく　やうぐや